

熱傷

☆やけどになったら

熱傷は初期治療が最も重要です。

受傷初日は流水で良く冷却し、早めに病院受診して頂くと良いです。熱傷の深さ、またあとが残るかは受傷後1~2週間様子を見ないとはっきりはわかりません。

☆やけどの治療

熱傷は火炎・高温の液体・薬品等の様々な原因で起こります。

当院は全国有数の熱傷センターを備えております。体表面積20%以上の広範囲熱傷、小児・高齢者の熱傷などの重症熱傷は致死率も高く全身管理を必要とするため入院治療を要します。

それ以外の熱傷は多くが外来通院にて治療可能です。

当院では形成外科外来に多くの方が通院されています。熱傷の深さや面積により、軟膏治療や手術療法を合わせ治療していきます。

①やけどの手術

明らかに深い熱傷の場合や、2週間以上様子を見ても治らない場合。皮膚を移植する手術を行います。

②やけどの軟膏治療・創処置

汚い傷や創からの液が多い場合はよく洗うことが重要です。

治りかけた熱傷や傷跡となったやけどは日焼け予防やケロイド予防が中心となります。

熱傷の状況に合わせ処置は変わるため通院が必要です。

湿潤療法（モイストヒーリング）

最近、湿潤療法はやっていないのですか？という質問が多いです。湿潤療法を、きれいに傷を治すことができる魔法のような治療のように思われている方も多いようです。湿潤療法は、傷を治す過程において最も基本的な処置であり、特別なことではありません。乾いた環境よりも潤った環境に保つ方が、傷を治すための細胞が元気に活動できるのです。ただ、軟膏にガーゼでは、傷を潤った環境に保つことは難しく、自宅にあるラップを使った方法なども良く紹介されています。ラップは医療材料ではないため、当院では使用することができません（トラブルが起きた時に責任が取れないため）が、さまざま

まな高機能な被覆材を使用することができます。

☆当院での湿潤療法

熱傷：非固着性ガーゼと軟膏の併用使用

⇒ガーゼよりも傷を乾かしにくくするフィルムが張っており、かつガーゼ交換のたびに治りかけていた組織をはぎ取らずに処置できる非固着性ガーゼを使用し、処置を行っております。

特に小児の熱傷では、処置時の痛みも少なく済み、またある程度の傷から出る体液は吸ってくれるのでむれも少なく、とてもメリットが大きいです。

外傷：非固着性ガーゼ、各種被覆材の使用

⇒特に顔面や指先などの傷に被覆材を使用し、処置時や日常生活における痛みを和らげることができます。また、高齢者の患者さんが自分で処置できない場合などにも被覆材の利用価値は大きいです。

☆湿潤療法ができない場合

- ①感染している、そのリスクが高い
- ②傷からの体液が多い など